

# 声楽と私

出口 正子



カルメン

私の生まれ育った家庭では、祖父は大の浪花節好き、サラリーマンの父は、趣味で謡曲と尺八を習っていました。そして母は、ラジオから流れるクラシック音楽を、いつも夢中で聴いていました。

集団生活が苦手で、内気な性格だった幼少の私が、幼稚園から逃げるようにして家路に就くと、母が耳を傾けるクラシックの名曲が私を迎えてくれました。

母は、クラシックの中でも特にオペラを愛し、台所仕事をしながら「君よ知るや南の国」を歌ってくれたり、オペラ鑑賞の為、しばしば私を劇場へ連れて行ってくれました。

中学時代に出会った素晴らしい先生の影響により、ひたすら学校の教師になる夢を抱いて音大に進学しましたが、そこで接した様々なジャンルの音楽に次第に魅せられ、のめり込んで行くうちに、当

時劣等生だった私も、いつしか真剣に声楽の道を意識するようになって行きました。

「ベルカント」という発声を学ぶ為にイタリアに渡りましたが、その地で学んだことは数知れずあります。

紀元前の遺跡を現代に残すイタリアでは、そこかしこで「丹精」することの大切さに気づくことができます。

ラヴェンナの教会で見た渦巻き模様を描いたモザイク画は、「これから始まる歌の修行は果てしがない」と私に語りかけているようでした。

交通機関も現代のように発達せず、世の中ものんびりとして、船で移動していたような時代に活躍した往年の名歌手たちの「ひとつの声」へのこだわりがどれほどのものであったか、その「声」に命をかけてきたエピソードを聞けば聞くほど、「大変な世界に足を踏

み入れてしまった」と一抹の不安を覚えましたが、同時にまた、底なし沼のような深淵な世界に引き込まれていく自分をも感じていました。

眼で見えることも手で触れることもできない体の中の感覚と向き合っていく、ただ暗闇の中を行く、そのめくるめく日々は、まるで永遠に続くかのようでした。それでも時折、その感覚がすかすかに音をたてて動いたように感じる瞬間がありました。初めて歌を続けて来て良かったと思う瞬間でした。

長年のイタリア生活に別れを告げ、故郷に向け出発しようとしていた頃、イタリアでは折しも東洋の文化・哲学の素晴らしさがメディアを通じてさかんに語られるようになっていました。私自身もイタリアの友人から「弓と禅」という本を贈られ、「禅」について教えて頂きました。あるテレビ番

組で、「合気道」の創始者、植芝盛平先生が巨漢のアメリカ人を投げ倒すシーンを見た時は、「これがベルカントだ！」と思わず心の中で叫びました。肉体の限界を越えて、無限に広がる何かがあきつと

「声」にもあるのではないか、それが技術を磨くということではないかという強烈な想いにとらわれました。また「歌舞伎」という奥深い伝統芸術は、オペラに携わる私に多くの啓示を与えてくれました。長い年月をかけて厳しい修行の道を生きた芸術には、本物の美しさを感じます。日本人に生まれたことにより、「声」という楽器ひとつをつきつめて行く上においても、どれほどの恩恵を受けているか、そのこともイタリアで学んだ大切なことです。

私の夢は、「歌っているのに、歌っていることを忘れる」そんな境地と出逢うことです。

# 音楽の泉